

# 最優秀賞 国土交通大臣賞

## 「水」を考える

香川県 香川大学教育学部附属高松中学校

二年 松本 咲葵

「節水しましょう」夏が近づいてくると毎日のように、目にし耳にする。「節水」という言葉は、まるで地域限定の夏の季語になっていくかのようだ。

「まだ三十%ないよー。プールできるん!？」と小学生の妹が叫ぶ。朝起きるとパソコンを立ち上げ、早明浦ダムの貯水率をチェックするのが、彼女の日課になっているのだ。皮肉なことこの貯水率チェックのおかげで、%の意味をなんとなく理解できるようになった。

ここ香川では、毎年夏になると水不足になる。小学校六年間のうちに何回水泳の授業ができただろうか。簡易給食になり、紙ナプキンの上にパンが置かれたこともある。状況がひどくなれば夜間断水になってしまう。ニュースでは夏の風物詩のように早明浦ダムの底に沈んだ役場が姿を現したと伝えられる。日常的「節水」はしているはずなのに、繰り返される深刻な渇水。ふと気がつく、「夏になると水が足りなくなる」という状況が当たり前になってしまった私があった。

このとき私は「慣れてしまうことの恐ろしさ」に気がついた。心のどこかに『取水制限が始まって、まだまだ大丈夫。』貯水率が0%になっても、発電用水があるよ。』『そうこうしているうちに台風が来て、あつという

間に貯水率100%になるよ。』そんな楽観的な考えが潜んでいる。これはきっと私だけではないはずだ。

「のどもと過ぎれば熱さを忘れる」ということわざ通り雨の降らないことだけでなく、この意識も水不足が解消できない一つの要因になっていると私は思う。

私は、ため池のある香川の風景が好きだ。それは、昔の人たちが「どうしたら渇水を防げるだろうか?」と知恵を絞って作り上げた汗の結晶である。この緑豊かでホッとする風景をいつまでも見られるように残したい。そのためにも昔の人に負けないように、水と向きあっているかなければならない。

世界規模で見ると、まだ日本は十分水に恵まれている国である。しかし、現在地球上の六人に一人、つまり十億人の人々が安全な水が足りない危機的状況(水ストレス)に直面しているらしい。工業化や人口増加による水質汚染や水不足、温暖化による気象の変化などが原因だと考えられると、テレビで取り上げられていた。

こんな言葉を聞いたことがないだろうか。「二十世紀の戦争が石油とすれば、二十一世紀は水をめぐる争いの世紀になるだろう。」これは一九九五年、当時

の世界銀行副総裁であったイスマル・セラゲルディン氏の言葉だ。

日本は永遠に水ストレスの低い国であり続けることができるだろうか。日本でも近年、カラ梅雨やゲリラ豪雨などの異常気象が起こることがある。だから将来水ストレスが高まる可能性が十分考えられる。

今年の早明浦ダムの貯水率はようやく百%になった。しかし恵みの雨は、土砂災害などの危険も一緒に連れてきた。やはり水ストレスが低い今から、雨に頼らない様々な対策を行っていくべきだ。当たり前のことだが、私たちは水がないと生きていけない。水とうまく付き合っていく方法を形にすることが、私たちの責任ではないだろうか。

私たち一人一人にできることは限られている。けれども渇水の影響を受けている私たちが水の大切さを呼びかけ続けることが大きな力となるはずだ。

# 優秀賞 全日本中学校長会会長賞

## 水とくらし

栃木県 作新学院中等部  
二年 徳森 美咲

「おはよう」  
と洗面所の方から父の声がする。最近になって、コップ一杯の水だけで顔を洗うことに挑戦しているようだ。きっと私が書こうとしている作文の影響だと思われる。数ヶ月前、環境問題に対して、学校全体で具体的にできることはないかアイデアを出すという宿題が出た。この日から私は、自分でできることは何かないかとずっと考えていたところ、母が庭の花壇の花に水をあげている場面を見て思い付いた。雨の日に外にバケツを置いて雨水をため、それを花にあげれば水道の水を使わなくてもすむ。この考えはすでに東京ドームでは実行されているように、二万八千平方メートルもの広さといわれているドームの屋根に降水量一ミリの雨が降ったとすると、十六トンの雨水をためることができそうだ。そして、これを客席の下にある貯水タンクに集め、トイレの洗浄水や災害時の消防用水として利用されているらしい。この活動は、東京ドームだけではなく、都市部を中心にだんだん増えていっているということだ。  
朝起きて顔を洗い、歯を磨く。トイレに行く。お風呂に入り、また歯を磨く。洗濯もする。少し考えてみただけでも、一日にたくさんの水を使っていることがわかる。しかし家庭での水の使用量は、国ごとに著しく異なるよ

うである。途上国の中には一日一人当たり数リットルという国もある一方で、先進国では数百リットル、という差がある。日本の家庭の使用量も他の先進諸国と同様、最も高い部に属する。一例として東京での家庭で使用量は一日一人当たり約二百四十リットルの水を消費しているらしい。それに対し、色々調べていくうちに最低限の生活に必要な水の量は一日二十〜三十リットルという数字も出ている。つまり、実際に使った量との差である二百リットル以上の水を節約するということは十分に可能なのではないかと思えた。  
今年の四月から宇都宮市では、ゴミの分別が細かくなり以前までは可燃ゴミとして捨てていたプラスチックの物も再利用できるものとして、資源ゴミの仲間入りになった。実際に新しい分別をしてみると、今までゴミ袋満タンに入っていた可燃ゴミは、びっくりするほど少なくなり、自分たちが捨てるゴミのほとんどがプラスチックだということを実感した。効果を期待しながら、分別の説明書きを読んでいくにつれ、ある疑問が頭から離れなくなかった。例えばマヨネーズのボトルや納豆のパックもきれいに洗ってから出すというルールである。そうなれば、当然大量の水を使うことになり、プラスチックは再利用することができゴミも減量化することができるとも

知れないが、その分他の資源を無駄に使ってしまうと思  
ったからだ。夏になり貯水量が減少すれば、水を大切に  
節水に協力しましょうと言いつつ、ゴミ減少化を唱えるとき  
にはきれいに洗って出してくださいと言う。目先のことを  
をただ解消することだけの対症療法ではなく本当の意味  
での解決策が見つつかれば良いなと切望する。もちろん、  
お役所の方々も少しでも良くなればと頑張って下さって  
いるに違いないし、それだけ難しい問題なのだというこ  
とも十分にわかっているつもりだ。なぜなら、自分で何  
ができるかと考えるだけでも答えは簡単に出てこないか  
らである。ただ、ほんの少しだけの工夫でも、みんなが  
一方向を向いて協力していくことができれば、きっと今  
より明るい未来も見えてくると思いたい。

ちなみに、父のコップ一杯の洗顔には落ちがある。冷  
たい水での洗顔は苦手ということで温かいお湯が出るま  
で水を流しっぱなしにしている。おいおい、それでは意  
味がないじゃないかと思わずつっこみそうになったが、  
最初の一步として見守ることにした。

# 優秀賞 水の週間実行委員会会長賞

## 一滴の水

茨城県 土浦日本大学中等教育学校

一年 廣瀬 裕貴

「うまいっ！」  
僕は小学生の頃、休み時間に友達とサッカーをした後、水道の蛇口をひねり、ガブガブと水を飲んだ。この時の水は、格別においしく感じられた。好きな時に、好きなだけ水が飲める幸せを、僕は誰よりも知っている。

小さい頃、僕は病気の為に、厳しく水分制限を強いられていた。一個二ミリリットルの氷を作り、それを一日二十五個。わずか、五十ミリリットルしか口にすることができなかつた。人間の身体は、六十パーセントが水と言われ、平均水分摂取量の約二十分の一しか口にしていなかつた事になる。点滴で水分を補っていたとは言え、僕はいつも喉がカラカラだった。幼いながらに、一滴の水も無駄にしないように、必死だった。それだけに、今自由になんか飲める事が、どれほどありがたい事か、感謝せずにはいられない。

僕達の生活に、水はかかせない。歯みがきに始まり、食事をするにも、お風呂、トイレ何をするにも、水がなければはじまらない。地震の多い日本では、時として大変な被害に襲われる。ライフラインは寸断され、たちまち平和な生活は、苦境へと変わってしまう。電気やガスももちろんだが、一番困るのはやはり水だ。何より、人間の生命を保つ為にはかかせないものだからだ。この、なくてはならない水が、突然その姿を変え、僕達に襲いかかる事もある。僕が住む龍ヶ崎では、度々小

貝川の決壊による水害にみまわれた歴史がある。多くの家が浸水し大変な被害だったと、祖父母が話してくれた。水の威力が大変なものだと、テレビの実験番組で見た事がある。わずかな水でも、水圧によってドアを開く事は困難となり、迫りくる水に、生活のすべてが流されてしまう事があるとは、とても想像ができない。ニュースで見た津波の映像が、目の前で起きたらと考えるだけで、僕は足がすくんでしまう。

僕達の生活を守る生命の水が、僕達の生命を奪う脅威の水にもなってしまう。この両極端な二面を持つ神秘的な水と、僕達はどうか向き合っていくべきか、考えなければならぬ。

僕の住む地域には水田が広がり、春になると小さな苗が水の中で風にゆれている。小学生の時に、バケツで苗を育てた事がある。苗の水を吸い上げるエネルギーに、僕はとても驚いた。そして、夏には日照りの水不足を恐れ、秋には台風や大雨による洪水に怯え、黄金色の稲穂は、美味しい米となつて僕達の元に届けられる。この、米作りを経験して、僕は美しい水を守る為に何が出来るのか、何をしなければならぬのかを考えさせられた。歯みがきの水やシャワーを出しっぱなしにしないとか、シャンプーや石けんは必要以上に多く使わない事ぐらいしか思い浮かばなかつた。それでも、何か一歩始める事は、僕の意識を変えた。今では、食器洗いの洗剤の使用量も

減ったし、食器の油汚れは拭き取ってから洗っている。風呂の残り湯や米のとき汁を水まきや掃除に使うなど、僕にできる事が少しずつ増えてきた。水は、有限資源だ。一滴の水を大切に守る事は、僕達一人一人の生命を守る事にも繋がる。清らかな水のあるところには、さまざまな植物が育ち、人間はその恵を受けて、生きているのだから。そして、その水を大切に思う気持ちで、時に脅威へと変貌する水の被害からも、僕達を守ってくれるような気がする。

小さい頃、一滴の水のありがたさを感じたあの気持ちを、今も忘れる事はない。一滴の水は、たくさんの恵を与え、僕達の生命を守ってくれる力を持つ、奇跡の水だ。

「うまい！」

この作文を、一気に書いた僕の喉はカラカラだ。冷えた一杯の水は、また僕に大きなパワーを与えてくれた。

## 優秀賞 独立行政法人水資源機構理事賞

### 水からのおくり物

熊本県 熊本県立宇土中学校

一年 荒木 美里

「あつつういねえ、水源に行こうか。」  
そうやって出かける近くの水源は「轟水源」と言う名前  
で、私の大好きな場所です。

大好きな理由は、いくつかあります。一つ目は、この  
轟水源は水がきれいなことです。名水百選にも選ばれて  
いるほど水が透ききっています。遠くからペットボトル  
を用意して水をくみにこられたり、近所の方は井戸水と  
して生活用水に引いていらつしやるところもあります。  
今もお使われている上水道では、日本最古のものだそ  
うです。その水は冷たく透明で、手ですくって飲むと「お  
いしいっ」と感じます。こんなにおいしい水は百年以上  
の年月がかかってできています。山に雨が降って、  
その雨がしみこんで土の層を通り、ゆっくりゆっくりき  
れいになって、湧き出てくると聞きました。今、飲んで  
いる水はおよそ百年前のものと思うとびっくりします。  
私は、水がしみこんでいく様子を思い浮かべました。そ  
して、とても歴史ある水だと改めて感じました。  
二つ目の理由は、きれいな水の中に、たくさんの生き  
物がいると言うことです。小さな魚のオイカワや黒エビ、  
サワガニ、五センチくらいのドンコ、アメンボ、時には  
牛ガエルのオタマジャクシもいます。こんな生き物を捕  
まえられるのも轟水源のいいところだと思います。魚が  
口をパクパクさせたり、スイスイ泳いだりするところが

かわいくて、大好きです。

「あつ、そっちに行った。」  
「やったあ、捕まえたよ。」  
と言う声も聞こえてきます。綱を片手に一生懸命追って  
捕まえることが初めてできた時はとてもうれしかったで  
す。

こんなきれいな水のあるところだからこそたくさんの  
生き物がよってくるのだと思います。それに、魚を捕ま  
えて飼っている、新しい発見もありました。それは魚  
が元気なことです。お店で買ってきた魚に比べて、動き  
も速く、ビュンビュン泳ぎます。「これも水のおかげなの  
かな。」と思い、「元気に生きていているんだなあ。」と  
感じました。

三つ目の理由は、子供がたくさん集まっています。「楽し  
い！」と言うことです。私は真夏とても暑くて汗だくの  
日や、涼みたい時に、妹や友達とよく水源に自転車を走  
らせます。  
みんな、水の中に飛び込んだり、魚を捕まえたり、泳  
いだりします。気持ちが良いので、楽しいです。また、人  
も多くてにぎやかです。

「バシヤ。」「うわっ、やったな。」  
「きゃー。助けて。逃げろ。」  
と言う楽しそうな声も聞こえてきます。水かけ合戦と言

う私達が考えた遊びもあります。水をかけ合って、ぬれないようにするので。最後にはビシヨビシヨになります。すが、それが気持ち良くて最高です。

轟水源の周りには木や草花も生えていて、そこで遊ぶと自然に包まれたような気持ちになります。葉の間から見える光に反射する水もすぐきれいです。

でも、もし水源がなかったら、魚が元気に泳ぐことはできません。自然にある木も草花も生きていけないし、百年以上もかけてできたおいしい水も飲むことができません。遊べなくなったら、大好きな場所がなくなり、水かけ合戦もできなくなってしまう。また、この頃「水を大切に」と言う言葉をよく聞きますが、私は水の大きい役割の一つに、人を楽しませることがあると考えます。私達が水源で、笑ったり、うれしくなったりできるのは、水が人々が楽しめるようにしてくれているのです。これが、「水からのおくり物」だと思います。だから、水を守るために、ゴミを捨てたり、汚ない水を流したりしない事を、いつも頭に置いて過ごしていきたいです。

「あっおもしろい」そう思える水が、いつまでもこの轟水源にあり続けますように。



# 優秀賞 国土交通省土地・水資源局水資源部長賞

## 心のダム

栃木県 矢板市立泉中学校

二年 石下 香織

「ゴー！ダダ、ザブン！ザブン！」  
昨年の八月七日の朝のことです。私は、地震とも、大波とも思える物凄い音で目が覚めました。びっくりして窓から外をうかがうと、家の東側を流れる宮川が、いつもとはまるで違う恐ろしい姿をしていました。濁流がうねり、渦巻き、カーブしたところでは川の土手にぶつかって水しぶきが上がっています。川底からは三メートル以上あるはずなのに、川の水がもう少しであふれそうで、家まで流れ込んできそうです。今まで経験したことのない大雨で怖くなった私は、慌てて家族のところへ行きましました。言葉を失っている私に、祖母が話しかけてくれました。

「ほんとすごい大雨だね。だけど、うちは少し高くなっているから、水はのってこないから大丈夫だよ。」  
昔からこの地域で暮らしてきた祖母は、落ち着いていました。そして、それに続けて、こんなことを教えてくれました。

「ダムがなかった頃は、大雨が降ると毎回のよう大きい石とか流れてきて、もつとすごい音だったよ。うちの裏（後ろ）にあった家が川からのつた水に流されてしまったこともあったんだよ。ダムができてからは、そんなことがなくなつて、本当に良かったよ。」

水田はあるのに、山に沿った高台にばかり家があるのが、私の住む矢板市長井地区の特徴です。きつと、昔は

祖母の言う通り、度々水害に見舞われていたのでしょう。私の家のすぐ上流には、寺山ダムがあります。上水道水の確保と灌漑用に作られたロックフィルダムですが、大雨のたびに水がのったり、土砂災害に遭っていた長井地区にとつては、救いの神のような存在だったに違いありません。

生まれてから一度もひどい水害には見舞われたことがなかったのに、私はそこまでダムのありがたみというものを、真剣に考えてみたことがあります。でも、ダムがあつても、あの水位、あの勢いです。もし、ダムがなかったら、もつと大きな被害を被っていたことでしょう。私も心の底からダムがあつて本当に良かったと思えました。

でも、ダムだけに頼っているわけではありません。長井地区は杉、ヒノキなどを中心に数多くの材木用の木が植えられています。また、地域の特産品であるりんごの木もたくさん植えられています。森林には、水をためる働き、木が根を張って土砂崩れを防ぐ働きがあります。数多くの土砂災害を教訓にして、そういった「緑のダム」「森のダム」が作られてきたことも、災害を防いだ原因のひとつだと思います。

現在、ダムの建設がいろいろな点から見直されてきています。お金をかけずに、土砂災害が防げるならそれに越したことはありません。「ダムだけで治水を考えるな」

という考え方にも賛成できません。しかし、今は、伐採のし過ぎや林業の不振で、山そのものが荒れてきてしまっています。つまり、「自然のダム」としての働きが弱くなっています。また、アスファルト道路やコンクリートで固められた直線的な水路が、一気に水を集めることで起こる都市型の水災害も問題になっています。水災害の問題はますます複雑になるばかりです。だからこそ、地形や土壌、地域の特色、立地条件などによって、もっと細かに観察したり、データをとったりして、その土地に合った治水の仕方を考える必要があるのではないのでしょうか。

そのために私たちは、まず自分の住む地域やその関わる地域の水問題について興味を持つことが大切だと思います。そうすれば自分たちを取り巻く水の問題点を発見し、改善に向けていろいろな活動を展開することができそうです。水に関わる問題について、社会の一人ひとりが「心のダム」のようなものを持つことが、問題解決の近道だと思っております。

# 優秀賞 全日本中学生水の作文コンクール中央審査会特別賞

## 「水の力」

島根県 浜田市立弥栄中学校

一年 横山 綺乃

私の住んでいる弥栄町は、素晴らしい自然がたくさん残っています。澄んだ空気、豊かな緑、そしてきれいな水。

私の父は、そんな環境に恵まれた弥栄町で米作りをしています。無農薬、無科学肥料の有機栽培です。それにくわえて、もう一つの工夫があります。それは、すべての生命の源「海水」です。

父は、夏になると片道二十分以上かけ、美しい浜田の海まで海水をくみに行きます。そして、そのくんだ水を田んぼに直接流しこむのです。

「なぜ、そんな苦勞をして海水をかけるの。」私は不思議に思い、父に聞いたことがあります。父は、海水が素晴らしい働きをもっていることを教えてくれました。

海水はミネラルが豊富に含まれています。塩分（ナトリウム）はもちろん、植物の光合成に必要な重要なミネラルのマグネシウム、そして微量ではありますが何百種類ものミネラル。それらが稲に良い影響を与えます。海水は植物本来の生命力を引き出します。だから茎が固くなり、害虫がつかなくなったり、甘みやうまみの強いとてもおいしい米ができるのです。私は海水の力を知ってとても驚きました。海水のおかげで父のお米は弥栄町でもおいしくて一番になることが多いです。

また、父は海水だけでなく、弥栄の水も素晴らしい水

だと教えてくれました。田んぼに流している水は山からわき出てくる山水です。山水はナラやブナなどの広葉樹の落ち葉にろ過されて出てきます。そのため山の土に含まれている栄養を吸い込んで流れてきます。その水は、人にだけでなく植物にも良いのです。この山水と海水という最強コンビで美味しいお米を作ることができるようです。私はそれを聞いて水の力に驚き、うまく利用している父を尊敬するようになりました。

でも、最近海が汚れていると新聞やニュースでよく耳にします。工場や生活排水が流れこんだり、ゴミを海に捨てて帰ったり、事故で燃料もれを起こしたなど、原因は様々です。実際、青くてきれいな浜田の海も海岸には、たくさんさんのゴミがあり、「残念だな」と思います。もし、世界中で同じことが行われていたら、一体どれだけ汚染されているのでしょうか。汚染された海で育ったプランクトンを魚が食べて、その魚を私たち人間が食べています。考えてみると恐ろしいことです。そしてこのことは海の水だけではないと思いました。

先週、学校でスケッチ会がありました。学校のふもとに広がる水田で全校生徒が「弥栄の自然」を描きました。描きながら思い出しました。きれいな水に住んでいるというモリアオガエルやサワガニがここにはたくさんいること。そしてこのきれいな水のおかげでおいしいお米が

とれることを。  
私たちが弥栄に住んでいる人は山からわき出た水を一番最初に使うことができません。もし私たちがこの水を汚したらきれいな水にしか住めない動植物は死んでしまします。おいしいお米もとれません。そして、その水は浜田に流れていき、海も汚れます。  
「水はつながつていっているんだ。だから、皆が水を汚さないようにしていかななくてはいけないんだ」と改めて思いました。考えてみると、私達は小学校のころから、川の水を汚さないように、汚れのひどい食器はちり紙で拭いて返すことになっていきます。また、中学校でも、水を汚さない工夫がされています。例えば、川に直接流す流しでは石けんを使ったり雑巾を洗った水は流しません。小さなことですが、弥栄のきれいな水を保つのにこういった心がけが必要ではないかと感じます。  
私は「水の力」についてもっと学び、未来にきれいな水を残すためには何ができるのかを考え、行動していきたいです。